<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Title</td>
<td>近世読書研究の現状と課題  □ 横田冬彦編『読書と読者』の書評として</td>
</tr>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>ファンステーンパール □ ニールス</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>書物・出版と社会変容 □ 検索 索引</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>2016-03-10</td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Article</td>
</tr>
<tr>
<td>Text Version</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10086/27796">http://hdl.handle.net/10086/27796</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
「これ、今、限界だ」

対面に座っていたのは、彼女が以前、初めて見かけた男性だった。

「誰だ？」

彼女は、それが誰であるかを確認した。

「あ、彼氏だ」

彼女は、一瞬目を伏せたが、すぐに顔を上げた。

「彼氏？」

彼女は、その言葉を確かめるように、再度彼の顔を覗いた。

「うん、彼氏だ」

彼女は、その事実を受け入れ、彼氏の存在を認識した。

「うるさい」

彼女は、怒りを吐き出したが、同時に、その怒りは、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、彼氏の言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼女に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示していた。

「うるさい」

彼女は、その言葉を耳にしたが、同時に、その言葉は、彼氏に対する不満を示ていた。
本日の書評は、「紹介・評価・課題」という三節構成になるが、その前に本書の出版文脈についてはここに触れておきたい。というのも、本書は「読書と読者」というテーマを扱うものであるが、同時に「シンリーズ・本の文化史」第一巻（平凡社、二〇一五）は、まさにこの未開拓地をもつもの、「核心的問題」を明記し、明確な問いに直接関与するものである。特に、この種の研究に直接携わる関与者として、この勝負に軍配を上げられるほど知識はなく、滞在どころか、マス席でもなく、遠いイースト座り込む観客の観戦レポートとして聞いていただければ幸いである。

本書の構成は、九人の執筆者がもつ全九章からなる。各章が取り上げる事例研究の時代は、主に近世に限るが、その地域・身分・書物類が多様であるため、好みに従って、どこから解釈の基を結んで、本文に先立ち、横田氏による総論から読むのを強くお勧めする。というのも、そこで各章の内容紹介に加えて、従来の読書研究の大趨勢にみられるような展望が試みられているからである。概略は以下のよう

一 紹介
多様な身分と読書
まず、「和歌雑体今撰百首」の撰者を務めた甲斐国市川代官所改代の西村尊之丞を通じて、代官手代という役職と狂歌という芸芸の絡み合いを紹介する。続いて、館林藩の『雑体』狂歌会、弘化二年の移封において、秋元藩士が加わることにより、重層的な性格を帯びることになった過程を、秋元藩側の富田直道と、館林藩側の藤園雅直こと須賀重三郎を通じて明かにしていく。

『第三章 工藤航平『村役人と編纂物』』は、武蔵野国川尾幡領の悠よけと三保谷宿の名主を勤めてから隠居した、横見郡の批判と、そのトラブルを壮大な堤建設で解決に導いた藩主の顕彰、という二つの『他者』を設定するこ

と。工藤氏は成立年月や、構成項目の分量、内容・文体などを踏まえ、もう一つの意図を指摘する。

一見して川嶋領における水害の歴史を書き留めているも

では『河嶋堤桝記』は、河内国形で、領内の村役人をはじめ、民全体と広く共有するこ

とにより、自身を含む田中家という地域指導者としての

存在の強調をはかったという。

『第四章 山中浩之『在村医の形成と蔵書』』は、河内国

のにも見えるが、工藤氏は成立年月や、構成項目の分量、内容・文体などを踏まえ、もう一つの意図を指摘する。

なお、工藤氏による『河嶋堤桝記』は、河内国形で、領内の村役人をはじめ、民全体と広く共有するこ

とにより、自身を含む田中家という地域指導者としての

存在の強調をはかったという。
第五章 横田冬彦「農書と農民」は、知名度の高い書物を通じて、農家というジャンルに与えられている。実質的な農業に関するものであるために、社会的な影響力が大きく、農業史の研究において重要な役割を果たしている。

第六章 引野野館「仏書と僧侶・僧侶」は、近世仏教の成立についての研究。特にその思想や教義の形成過程についての考察がなされている。農業と仏教の関係についても検討されている。

第七章 青木美智男「近世後期女性の読書と書物について」は、女性の読書と書物の関係についての研究。特に女性の読書活動の変化や、書物の普及についての考察がなされている。
者が多く存在した実事がわかっても、そのあり方を示す資料がなかなかない。女性日記では触れられておらず、近年数多く発見されている蔵書目録、その他が着眼するのでは、男性は女性向けに書かれた文学ジャンルである。最近の流行を積極的に取入れた女性本を掲載する読書を読者の場面の分析を通じて、女性の顕著が目されるのは、女性本を著者から楽しむことの多いことを明らかにしている。

第八章、鍛冶陽子「地域イメージの定着と日常教科書」は、書物が旅人たる旅者の影響を検討するものであり、鍛冶氏の造語であり、「教科書や辞書」といった本が用いられる用途に応じた用語や教科書の中の総称であるが、その書物群が大抵の道具や教科書を通じて、多くの鉄人は渡って大問なのは、手伝いの役割を果たすものと考えられる。そこで判らなかったことは、反復練習による、脳に運びこまれることとなる。

第九章、宮内貴久「明治期家族との関係と家相書」は、家相という商業を取り上げ、その歴史が明治に至る一連の続編であると結論され、もともと流儀の一つである家相学を年代順に調べてみる。理由の一つは、地方風水方病根切り短理磁石台という一人の家相家の生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通して明らかにしようとしている。琴生が関わった家相家は生涯を通
二
評価—「近代」からの開放

書評というものは、おそらくに分けて二種類があらわれることが多い。特に、著者の意図にあった書評・著者が設定した目標をどこまで果たされているか、それが評価の対象となる。書評の意図にあって、著者の意図に相応した書評が与えられる。評者は著者が提供する情報や仮説を、著者の意図と関係なく、自分の力で解釈する点において、評価の意味があると考える文脈で語りなおし、意義づけるものである。著者が意図した情報が「しないものね」において、評者が必要とする情報がなかった場合、評者が書評を担当することになる。そのため、書評は持つべき情報が不足する場合、評者が情報を探すために書評が行われることになる。

このために、評者は自分の力で情報を探す。このためには、情報が足りない場合は、情報の不足を補い、情報が足りる場合は、情報の不足を補う。
本書は、「近代」からの開放が読書研究にもたらした豊かな現状をよく反映している点が大変評価できる。従来の読書研究の問題関心は、変革主体・消費者・国民ともなりうる大衆としての読者や、内面的な黙読によって自形成をする個人としての読者などの一対比して正反対の対象注がれてきたが、二つともあくまで「近代読者」の面でであり、近世読者はその対照的な存在で、もしかは準備段階的な存在としてしか視野に入ってこなかった点におい共通していた。また、近代への関心が直接的ない近世読書研究で、この近代読書論が提出した枠組みと観念を脱することができなかったのである。たとえば、水野稔の「近世文学で作者と読者を問題にするならば、やはり小説作図が中心となるのだろうか。」という文句は、中村素彦の「読者だけの読者、というのがある文学作品は何か、それは昔の名も商品文学だ」という記述に、近代読者論における「読者」が、単に「読者」ではなく、商業としてのOrigin、MIMEディアが対象とする、不特定多数の読者に限定されていることわざがそのまま反映されている。

対して、本書においては、このような「近代」へのこだわりがすっきりと消えている。「特徴多様」の語さえ取り上げられない読者は、立体的な個体性のあるものばかりで、彼らはMIMEディアが注ぎ込む情報・身分にした面ではなく、その個性と置かれている環境・身分にした面で、能動的に読書に取り組んでいる。「読者共同体」を形成する。従来の読書研究では、十分に脚光を浴びなかった、晴れ姿の読者が次々と登場する一冊である。その上、ここに示されたテーマにおいてすでに厚い業績を残している一人者として、しっかりとした大変良いのである。この点において、本書はその目的どおり、読書研究の現状への優れた紹介となっている。

だが、裏を返せば、この史料と方法の幅の広さは、焦点の拡散とも捉えられる。近代の束縛からの解放は、同時にいまさらやりとめた目標の喪失をも意味する。横田氏が、先に触れた「散文」の中に現在社会を「直直に生きると
いいう「普通のひととの生きうね」が大きく揺らいでい
る時代」の下、その果て、その喪失感を日常生きにそっ
て聴いたものの理解するか、もちろん、研究者たち社会の一
員として、その影響下にある。民主主義・資本主義・自
主義などの戦後歴史学がもっていた普遍的な座標軸が
自明でなくなり、現代社会にどう貢献できるか、という自貢
の歴史学者たちが共有している模索課題であろう。近
代における企画情報は何しているかを歴史学において、どの位置く
この問題は複雑で、この時代の特徴である「現代の」を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭
生がする場であるこの時代の特徴を頭

本書も、紙媒体の書籍がなくなるのではないか、書籍の時代は終わりつつあるという危機感を確認した上、その現状に対抗して、「書籍が時代のなかで担ってきた歴史的役割を明らか」と（傍点評者）にしようとしている。もちろん、大変大事な課題ではないが、問題をこないほど重要でない。書籍は単に情報伝播の手段でしかない。新しい情報伝播の手段が生じた現在、書籍はその役割を果たす必要がなくなってしまう。当然、これにより書籍の価値が低下する。一方で、書籍の価値は新しい情報伝播の手段を用いることで増大する。これにより、書籍の価値が逆に下がることは避けなければならない。これは、書籍の価値を評価する上で大切なことである。

要なのは、対立観もしくはノスタルジアではなく、むしろ、新たな方法を模索することである。書籍の価値を高めるためには、新しい情報伝播の手段を用いることが必要である。書籍の価値は新しい情報伝播の手段を用いることで増大する。これにより、書籍の価値が逆に下がることは避けられない。これにより、書籍の価値を評価する上で大切なことである。

三 読書研究から「ヨム」研究へ

読書研究から「ヨム」研究へは、表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部である。表現の一部を解釈の一部分を解釈の一部である。
その張り紙のメッセージをさらに広めるために採用したのも、屋外で行なわれた、一枚摺りの手渡しや、大絵馬を神社に奉納することであったのである。近世のメディア空間の範囲をどう考えたか、人々はそれをいかにヨミをメ

ディア空間の中で考えるのは、ただメディア・場所・書体などにとどまるのである。このように、ヨミをメ

ディア空間の中で考えるのは、近世中期における伝承迷信打破運動がある。この運動の中心人物を行動に働きかけた

会、室内での読書ではなく、お菓子屋の外壁にあってあ

インターンの「精通した読者」（implied reader）のよ

フィッシュ氏の「精通した読者」（implied reader）のよ

文芸批評的な読書論を展開する力も課題で

現風潮において、「表象」はなくてはならない視点である。特に、現在「思想史化」という歴史・文学史研

表象の立身出世主義をささえるために、ある程度機能してい

こことは否めない事実であろう。
The page contains a mix of text and symbols that are not clearly legible. The text appears to be a mix of languages, including Japanese and English. There are several paragraphs and sentences, but the content is not coherent and difficult to understand. The page seems to be part of a larger document, possibly a book or a research paper, but the specific context is not clear from this single page.

**References**
